

# 図書館通信 — 40 —

1977. 4

## \*\*\* 新 入 生 の た め の 特 集 \*\*\*

### 新発展段階を迎える附属図書館

館 長 中 沢 正 寿

昭和24年静大創立とともに、附属図書館も発足。以来約30年、どのように成長し、どのような方向に発展しようとしているか。その歩みのアウトラインを摘記し、全学の皆さんの理解と協力を期待し、かつ新入生歓迎の挨拶にもしたいと思います。

インドの図書館学者ランガナータンは「図書館は成長する有機体である」と言っているそうです。わが静大附属図書館発展の歩みも、これを個人の成長発達にたとえる視点から眺めると、10年を周期とする次のような四つの発展段階に分けてとらえてみる事ができると思います。

#### 1. 昭和20年代～胎児期（あけぼの時代）

昭和24年静大創立の年の11月、中央図書館制度、集中管理方式を原則として発足。中央図書館を文理学部構内に置き、各学部は分室としてという形で、その機能を遂行。

#### 2. 昭和30年代～幼児期

（中央図書館誕生の時代）

昭和34年6月から36年3月にかけて、大岩に中央図書館の新館完成。館長1、事務長1、係長3、係員7の機構で業務遂行。34年9月、文理、教育両学部分室統合、農、工、教育浜松分校の分室は分館と改称、中央図書館と、これら各分室とを合わせて「附属図書館」と改称。

#### 3. 昭和40年代～児童・青年期（移転・統合・集中による問題生起・流動時代）

昭和43年6月大谷地区に附属図書館落成、7月移転、9月開館。41年4月工学部分館を浜松分館と改称、47年3月その建物完成。48年4月農学部分館、本館に統合、予定の統合完了。

#### 4. 昭和50年代～成人期（問題解決による確立・発展時代）

昭和52年度概算要求における事務機構の整備として1部2課制の内示、国立大82校中17番目の事

務機構、業務システムの高度化による質的強化。なお建物の増築も、既存約3,624㎡に対し約3,000㎡を、52年度一期工事として着工を交手中。

以上のような歩みを経て、50年代の新しい発展段階に入っているのが現在であるといえます。40年代に生じた未解決の多くの問題を、将来構想9項目に照らしながら、図書館委員会を中心として、図書館基本問題の検討を通して解決しながら、50年代の新たな発展段階の基礎を確立していきたいと思っています。全学の皆さんの附属図書館の活用が出発点であり、帰着点でもありますので、理解と、なみなみならぬ協力とを重ねておねがいます。

#### 館内案内

を下記の通り行ないますので、御参集ください。

- |       |   |
|-------|---|
| ○期 間  | 4月18日(月)～25日(月)   |
| ○時 間  | 第1回 11:00～<br>第2回 13:00～<br>第3回 15:30～<br>(但し、土曜日は第1回目のみ) |
| ○所要時間 | 毎回40～60分  |
| ○内 容  | 図書館案内(書庫内見学も含む)利用案内 他。<br>なおフィルム上映を併せて行ないます。              |

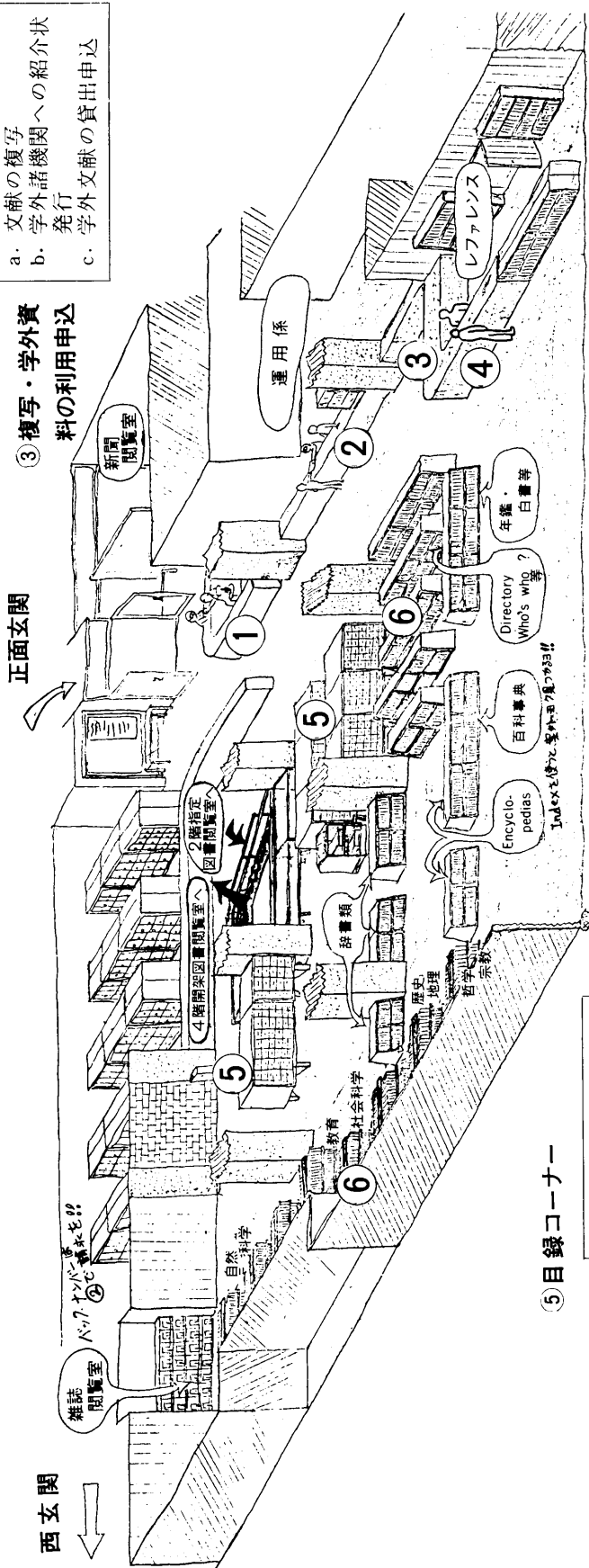
# 三階鳥かん図

## ① 受付

- a. 入館・退館の手続
- b. 館外貸出証申込受付・発行
- c. その他インフォメーション

## ② 貸出・閲覧・返却

- a. 所蔵文献の貸出
- b. 書庫内文献の館内閲覧
- c. 貸出文献及び閲覧文献(書庫所蔵分)の返却



## ③ 複写・学外資料の利用申込

- a. 文献の複写
- b. 学外諸機関への紹介状発行
- c. 学外文献の貸出申込

## 正面玄関

## 西玄関

## ⑤ 目録コーナー

- a. 著者名目録・書名目録(A B C 順排列)
- b. 分類目録
- c. 特定図書の有無・図書の種類・位置 etc. の確認

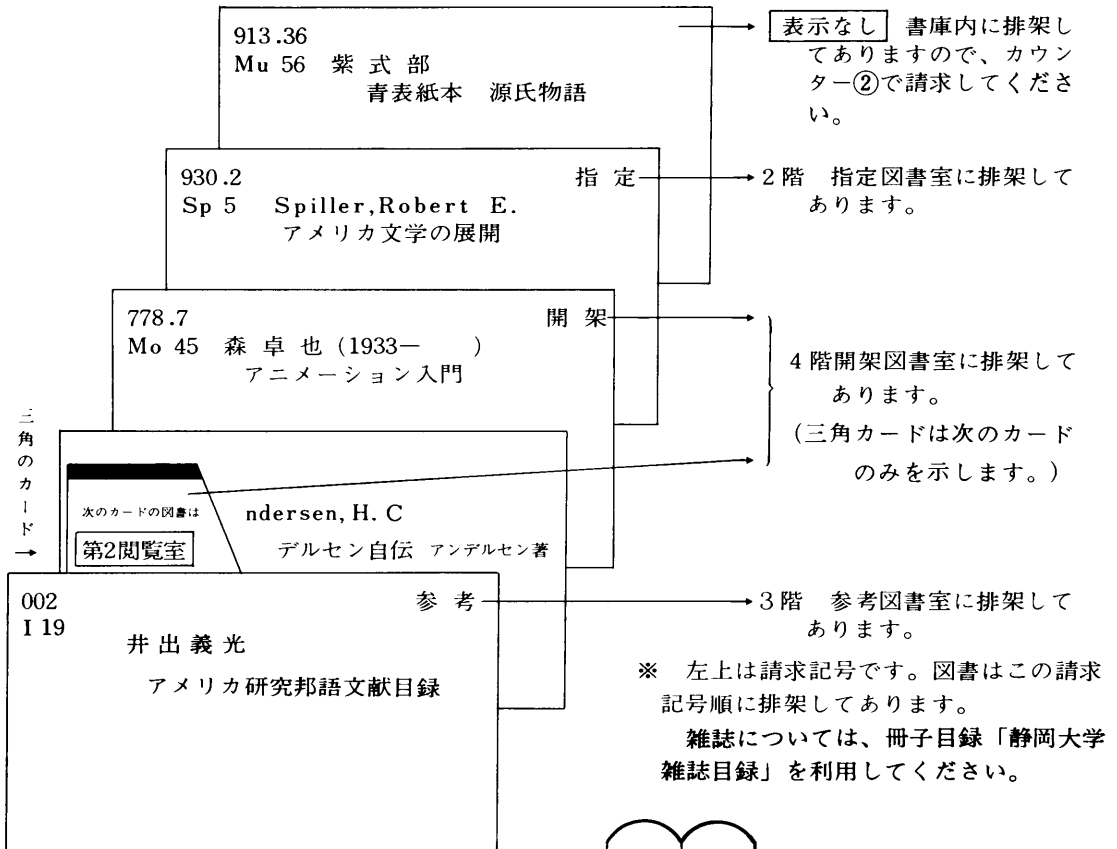
## ⑥ 参考図書コーナー

- a. 辞書・百科事典・年鑑・白書 etc. の各種参考資料
- b. 館内閲覧のみ閲覧後は返却台へ

## ④ レファレンス

- a. 図書利用案内
- b. 目録利用案内
- c. 書誌事項の確認
- d. 文庫の所在確認
- e. 他館の利用案内
- f. その他の調査

## 目録における図書排架位置の表示



## 蔵書の種類

**開架図書**……4階閲覧室に25,025冊の図書があります。ここには一般的によく利用される学生の学習及び教養のための図書が備付けてあります。

**指定図書**……2階閲覧室に16,775冊の指定図書があります。指定図書とは、教官が講義の内容に関連ある資料を指定し、学生はこれを読んで学んでゆく、いわゆるリザーブ・ブックの制度による図書が備付けてあります。

**参考図書**……3階参考室によく使用される参考図書(辞典・事典・書誌・目録等)が5,232冊備付けてあります。

**書庫内の図書**……古い図書および特に必要とみなされた図書は書庫にあります。これらは、全て目録にあり閲覧できます。

書庫内にある主な図書。

- 岩波文庫
- 岩波新書
- 旧制静岡高等学校蔵書等



## サービス時間

## 窓口受付時間

窓口諸業務を行なっている時間帯は次のとおりです。( )内は土曜日。

## 平常時

- ①受付 9:00～17:00 (9:00～12:00)
- ②貸出・閲覧・返却 9:00～17:00 (9:00～12:00) [但し貸出・閲覧はそれぞれ16:50および11:50まで]
- ③複写・学外資料利用申込 9:00～12:00, 13:00～17:00 (9:00～12:00)
- ④レファレンス 9:00～12:00, 13:00～17:00 (9:00～12:00)

## 試験期

(9月、1月、2月)

- ①受付 9:00～19:30 (9:00～16:00)
- ②貸出・閲覧・返却 9:00～19:30 (9:00～16:00) [但し貸出・閲覧はそれぞれ19:00および15:30まで]
- ③複写・学外資料利用申込 平常時と同じ
- ④レファレンス 平常時と同じ

## 休館日

日曜日・祭日・本学創立記念日(6月1日)  
その他図書館業務上必要な時(「図書館通信」  
・掲示等でお知らせします。)

## —— 新入生のための文献入手の案内 ——

自分の求める文献・資料が、図書館を利用してどのように入手できるかということ、具体的な例を挙げて説明してみます。

### 例 1

■夏休みに南九州の屋久島へ登山を目的とする旅行を計画している。市販のガイドブックの末尾に、簡単な屋久島関係文献資料の目録が記載されていた。出発する前にガイドブック以外の文献で、屋久島に関する若干の知識を仕入れておきたいと思っていたので見てゆくと、そのうちの

「海上アルプス屋久島連峰」遠崎史朗著

雲井書店 昭42

「屋久町史」屋久町役場 昭39

の2冊を是非読んでおきたいと思い、図書館へ足を向けた。

＝入館したら、3階の⑤目録コーナーで目録をひき（書名・著者名のどちらからでもひけます）、これらの図書が図書館にあるかどうか調べて下さい。もしあれば、閲覧・貸出ができます。——しかし、これらの図書は静大に所蔵されていないことがわかりました。

このような時には、これらの図書を所蔵している学外の他の図書館・大学へ貸出の申込を行ないます。それには先ず、どの図書館・大学にこれらが所蔵されているかを調べねばなりません、④レファレンスへ気軽に相談すれば懇切丁寧に調査してくれます。諸機関の種々の蔵書目録が図書館に整備されていますが、さしあたっては④に備えつけられている国立国会図書館蔵書目録の「歴史・地理 昭和34-43年」を調べてみると、“日本史（地方史）——九州地方——鹿児島県”のところに、

屋久町（鹿児島県）219.7-Y 149 y

屋久町誌 屋久町誌編纂委員会編

屋久町（鹿児島県）昭和39（1964）

237 P 図版 22 cm

があり、また“地理・地誌・紀行（日本）——地方誌——鹿児島県”のところに、

遠崎史朗 291.97-T0 567 y

海上アルプス屋久島連峰 その風土と未踏の山々へのいぎない

東京 雲井書店 1967

214 P（図版共）地図 19 cm

があります。このように所蔵先がわかったならば、窓口③へ行き、学外文献の貸出の申込をし、必要な手続きをとります。但しこの場合、その所蔵先の図書館ないしは大学が、貸出に応じてくれるところに限ります。国会図書館の場合、申込からお

よそ2週間で現品がお手元に届きます。

■さらに、屋久島の山について書かれた雑誌記事があれば是非読みたいと思い、図書館に月刊雑誌『山と溪谷』の1号（昭和5）から379号（昭和45）までの記事の総索引があったので見てゆくと、

屋久島の山と人々（新井久雄）34-3

屋久島の山（松本徭夫）36-11

という記事が面白そうである。図書館に所蔵があれば是非読みたいのだが。

＝この場合、先ず静岡大学雑誌目録和文篇で『山と溪谷』の所蔵巻号を調べます。（もしあれば閲覧・複写ができます）——そうすると、昭和34年3月号と昭和36年11月号はいづれも欠号であることがわかりました。

このような時には、この雑誌のこれらの巻号を所蔵する学外の他の図書館・大学へ複写の申込を行ないます。（雑誌の相互貸借は原則として行ないません）それには先ず、図書の時と同様、この雑誌のこれらの巻号を所蔵する学外の図書館・大学を調べねばなりません、その際最も便利なのは、④に備えつけてある学術雑誌総合目録（人文科学・自然科学別、それぞれに和文篇・欧文篇あり）を見ることです。但し、これに収録されているものは学術雑誌（紀要等を含む）に限られていますので、『山と溪谷』のような一般誌は掲載されていません。そこで④レファレンスに相談すると、備えつけてある国立国会図書館所蔵雑誌目録 昭和48を調べてくれました。それには、

山と溪谷 山と溪谷社

1～82号（昭5.5～18.11） 雑19-117

欠：51, 69, 72, 73, 76～81号

85～337号（昭21.1～41.12） Z 786.1-Y 2

欠：310号

338号（昭42.1）～ Z 11-23

と、所蔵巻号が明示されています。そこで窓口③で、学外文献の複写の申込をし、必要な手続きをとります。但しこの場合も、その所蔵先の図書館ないしは大学が、複写サービスに応じてくれる所に限られます。国会図書館の場合、申込からおよそ3週間以内で現品がお手元に届きます。

### 例 2

■フランス19世紀の詩人・小説家のテオフィル・ゴーティエの作品に“Histoire du romantisme. 1874.”という作品があることを知り、興味を覚えた。読んでみたいと思うが、邦訳されたものがあるだろうか？

＝このような時も、⑥参考図書コーナーへ行く

と、明治・大正・昭和翻訳文学目録（国立国会図書館編 昭34）が備えつけてありますので、先ずそれをひきます。著者のアイウエオ順で、ゴーティエのところを見ると、

青春の回想 渡辺一夫 角川書店 昭22

Histoire du romantisme. というのがあり、“Histoire du romantisme.”には「青春の回想」という邦訳名の翻訳書があることがわかります。このように出版事項が確認されましたので、早速本館の目録で著者、書名からこの図書にあたってみますと、この図書は静岡大学には所蔵していないことがわかります。

そこで学外の他の図書館・大学の蔵書目録にあたってみて、この図書を所蔵しているところを調べてみます。さしあたって④レファレンスに備えつけられている国立国会図書館蔵書目録のうち、昭和16年1月～昭和24年3月受入の部をひいてみますと、“950フランス文学”のところはこの図書が記載されています。（請求番号 950.2 G 27ウ）

そこで③の窓口（学外文献の貸出申込）へ行き、国会図書館への図書貸出の申込をし、必要な手続きをとります。

### 例 3

■フランス近代の作曲家エリック・サティについて、最近数年間に何か論評されたものはないか？  
—このような場合には、⑥参考図書コーナー備

えつけの雑誌記事索引（国立国会図書館参考書誌部監修。科学技術編と人文・社会編とに分れていて、国立国会図書館に納本された和雑誌中の論文の索引）を利用すると便利です。そこで「人文・社会編」の昭和45年以降の記事にあたってみることにして、「累積索引版 昭和45～49年」中の「シリーズⅪ 芸術・芸能・スポーツ」を見てみると、“音楽 — 近代”のところ、

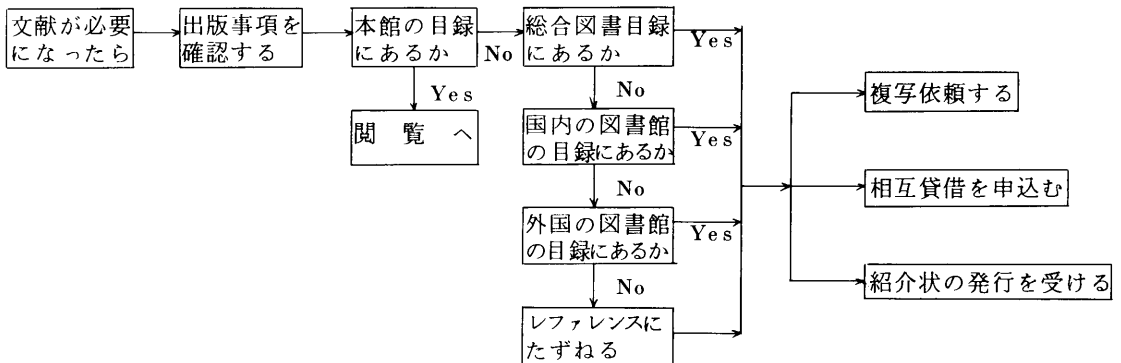
八田惇 エリック・サティ — 現代フランス音楽の先駆者：大阪音楽大学研究紀要 12〔'74.2〕P. 19～43

という記事があることがわかります。

そこで静岡大学雑誌目録和文篇をひくと、「大阪音楽大学研究紀要」は図書館に所蔵されていますが、しかし12号は受入されておりません。—そこで④レファレンス備えつけの学術雑誌総合目録 人文科学和文篇を開いて、所蔵する学外の図書館・大学を調べます。「大阪音楽大学研究紀要」のところをひくと、この研究紀要を所蔵する機関名ならびに所蔵巻号が明示されていますので、12号を所蔵するところを確認して、窓口③で学外文献の複写申込をします。

※また窓口③では、学外諸機関への紹介状を発行いたします。他大学の図書館等を利用したい場合には、お申してください。

以上、2, 3の具体的な例を挙げて説明いたしましたが、図式化してみると下のようになります。



## 教室と図書館

松本欣二

大学の教室における教育にはカリキュラムが用意され、そこには過去の学問が集積されており、指導法もちゃんと確立している。クラスが進み、次々と進学していけばムダなく、能率的に学んでいくことができる。けれどもその教育を一面から見ると、型にはまった知識、考え方に人を押し込めてしまう既成品教育に陥りやすい危険もある。

一方独学の勉強法はこれとまったく対照的なものである。けれどもそれは我流に流れやすく、苦勞が大きく、ときには回り道をしてしまうマイナス面をもっている。教室コースはエスカレーターのようなもので、のっかりさえすれば、上へ上へと自然に運び上げられていくのだが、独学の人は、自分の足で一歩一歩、道を踏み分けて頂上を極める登山家のようなもので、それを持続し続けるのは強い意志の力が必要であるが、この勉強法からは、極めてユニークな知識と考え方が生まれてく

る可能性がある。

先生の用意してくれた舗装道路のような教室での勉強というのは、実は大学を卒業するあたりまでのことであって、最先端の研究には、だれも先生などおらず、道もついていない。だれもやっていない未知の分野に踏み込んでいくには自分の力、独学しかないのである。独学とは自分一人だけで勉強するもの、先生のいないもの、と思われがちだが、正確に言うと、独学とは特定の先生に師事していないということだけである。

教室コースであっても、独学コースであっても、自ら求める心がなかったら大学、大学院へと進んでみたところで、どこにも自分にとっての先生は見つけ出せない。自ら求める心が高まり、一切を師とする態度が身につけば、図書館は知識の宝庫となる。ここには無数の師がある。私の学生時代を考えてみても、教室で得た知識よりも、自ら求めて本から得た知識の方が、一般教養でも専門でも多かったように思う。教室はオーソドックスなコースで学ぶ所であり、図書館は独学によって学ぶ所であると考え、この両者を並用することによって、両者の長所を取入れた勉学ができるものと私は考えます。(工学部・情報工学)

## 私のすすめたい本・31

— 新入生にすすめる —

### 私と歎異抄

山下秀智

大学に入って間もない頃、私は様々な人生の悩みを抱えていた。その頃、私のポケットには、常に岩波文庫本の※「歎異抄」があった。数冊がボロボロになったのを覚えている。具体的な人生の悩みについても、論理上の問題についても、不安の内に私は「歎異抄」に向けて問うた。この薄い一冊の本(当時は50円)は、確かな手応えをもって答えてくれた。人の書物との出会いは様々であり、私は、「これを読め」といって、学生諸君に何らかの書物を押しつけるのはナンセンスだと思う。私は私の一冊の書物との出会いを語ればそれでいい。

私は大学、大学院と宗教哲学(キェルケゴールの思想を中心に)を専攻した。或る友は、哲学をすることの内に人生の悩みの解決を求めていた。私は少し考えが違って、その友に、哲学は趣味でしているのだと言って、大いに批判されたことがある。しかし、今でも私はそう思っている。なぜなら、意識の壁を破る、独我論を脱する、安心するといったことは、哲学することよりも、もっともっと大問題だと思うからである。

私は、「歎異抄」から「教行信証」へ、「教行

信証」から、浄土仏教の大いなる願の世界へと目を見開かされていった。それは結局唯識、中観を経て原始仏教にまで通じる道である。現代のように、歴史意識の強い時代に、仏教思想は、力弱く、又日和見のものに見られ易い。しかし、単に感覚的にそう思って切捨てるのではなく、一度は真剣に振返ってほしいと思う。人間の真実を込めた仏典が確かに待っていると思うのである。

臨済は、仏に逢えば仏を殺せといひ、無位の真人を説いている。私は仏教徒ですなどと執すれば、最早仏教はない。それ程に、人間の自由の根源に至ることを目指しているのである。仏教は、世界の実体性と共に、私の実体性をも否定する。しかるに、我々の日常生活は、一切に名前をつけ実体化し、それに執着することによって成立している。それも又大切なことだが、少なくとも、概念や論理によって、人生を仮構することだけは、心して避けたいものである。

やたら難解に語った。最後に、私は学生諸君が大学時代に一度はドストエフスキー・ショックを受けられることをすすめたい。又、ゆっくりした娯楽のひとつときに、アガサ・クリステイの推理小説を。(教養部・哲学)

## 科学は人間によってつくられる

鈴木武彦

書物というものは、人にすすめられて読むものよいが、自ら探し求めて読むように努めることが好ましいものである。ところが現在は洪水のように多数の本がつぎつぎに現われており、しかも高価なものが多い。したがって、この中から適当な本を選択して読みこなすことは大変なことである。本を選ぶてがかりとして、書評や先輩・友人の話などがある。これらを活用するのも一つの方法である。ここでは、出版されたとき好評を博し、また私自身にも印象的であった一冊の本をあげておく。ぜひすすめたいというよりは、本の紹介として記しておこう。参考になれば幸いである。

※W. ハイゼンベルク著 山崎和夫訳

「部分と全体」— 私の生涯の偉大な出会いと対話 — みすず書房 1974

著者のハイゼンベルク(1901～1976)は現代物理学の基礎である量子論の創始者の一人であり、物理学のみでなく哲学・思想にも大きな影響を与えている。また、天賦の才ばかりでなく、良き師と友人にも恵まれていたが、本書は彼らやその他の人々との対話を主体として書かれた哲学的色彩の強い自伝である。

「科学は人間によってつくられるものでありま

す」という文章から始まっているが、この自明であるが忘れがちなことを本書によって強調しているのである。高校生のときの原子や分子についての友人との会話から始まって、物理学者となつてからの討論など、多くの対話が生き生きと再構成されている。もちろん、対話だけでなく、自分自身の見解も述べられている。「自然は理解され得るように作られている、あるいは、より正しくはわれわれの思考能力は自然を理解し得るように作られている」というのがハイゼンベルクの確信である。また、英国や米国の物理学者の自然観や方法論についても書かれてあり、ある点では著者は気に入らず、反対もしている。「人間によってつくられる」ゆえに、国民性あるいは個性の違いが科学に反映されるのは当然かもしれない。

本書は物理学のことが中心になっているが、その他に学生時代のこと、物理の研究に入るいきさつ、宗教と自然科学の関係、生物学、物理学および化学の間関係、第二次大戦中の科学者としての苦悩、戦後の政治と科学との関係などについても書かれている。したがって、物理に全然、あるいは未だ馴染んでいない学生諸君も、適当に拾い読みすることによって得るところがあるかもしれない。また、量子力学を将来学ぶときに、物理に関した部分を読めば、創始者自身が語るその背景を知り、強い印象を受けるであろう。

(理学部・物理学)

## 私の推薦書—男女平等実現のために—

山 脇 貞 司

1975年にメキシコで国際婦人年世界会議が開催され、婦人の権利と平等を実現するためにメキシコ宣言や世界行動計画等が採択された。そして後者をうけて、我国でも本年2月に「婦人の十年国内行動計画」が政府によって発表された。これに対して、多くの婦人団体は「婦人の労働基本権が明記されていない」とか「男女役割分担固定化を打破する姿勢に乏しい」などの多くの批判をしてきた。男女不平等の問題は女性だけが考えればよいといった問題でないことは明らかである。政府は今後10年にわたり婦人の権利と平等を実現するために何らかの行動を起こすことになるが、我々一人一人がこの問題に対する科学的な認識をもち、発言し行動しなければ事態は改善されないであろう。その意味で学生諸君につきもの2冊の古典的名著を読まれることを勧めたい。一つは、エンゲルスの※「家族、私有財産および国家の起源」(国民文庫、岩波文庫等)である。同書は、モルガンの学説に依拠し、史的唯物論の立場から家族・氏族の発展過程と国家の成立の問題をとりあげてい

る。1884年の初版の序文の命題や家族発展段階説など論争の多い書物だが、そのおおまかな内容はつぎのようなものである。

先史時代には生産は本質上共同的であった。母権家族は氏族制度を生みだし、そこでは女は平等で自由であり、家計の運営も公的な性格を有していた。しかし、文明時代に移行するにつれて、畜群の馴致が男に富の私有をもたらすに至り、父権家族(個別家族)が氏族制度を解体させていく。女の家内労働は私的労働となり、妻は夫に隷従する存在となった。蓄積された富を所有する夫は自分の子にそれを相続させることを欲する。ここに妻にとってだけの単婚が成立する。この売淫と姦通を前提にし、かつ性愛に基づかない打算婚(家族)の成立と機を一にして経済的に支配する階級のための国家が成立する。単婚家族における夫の妻に対する支配はその反映なのである。それでは女の解放の条件は何か?それは、女が大きな社会的規模で生産に参加するときにはじめて可能となるとエンゲルスは説く。そして社会の経済単位でもなく、かつ個人的性愛に基づく男にとってもそうであるところの単婚家族を、エンゲルスは近代の大工業によって生じてきた労働者の単婚家族のうちにみようとするのである。

二つは、ベーベルの※「婦人論(上・下)」(岩波文庫、大月書店)である。同書も社会主義者の立場から婦人の問題を論じたものだが、190段階のヨーロッパの婦人の無権利と不平等の実態を詳細な資料に基づいて刻明に叙述されており、好文献といえよう。(人文学部 民法・商法)

## 「種の起原」はいかが?

西 垣 定 治 郎

入学おめでとう。大学に入って少し落ち着いたら、何かまとまった本を読んでみてはどうだろうか。同じことなら、かなり手ごたえのあるものの方がいいだろう。

そこで、少々まとも過ぎてははずかしい気もするが、ダーウィンの※「種の起原」をあげてみた。これは君達もご存知の通り、100年あまりも前の、生物の進化とその機構についてのべた本である。この本は、当時の生物学ばかりでなく、自然や人間に対する人々の考え方を根本からゆり動かした偉大な書物である。その影響は現在にまで及んでいる。現代科学と思想の多くは、この本で提起された主張の様々な発展と批判から成り立つと言ってもよい。たとえば、昨年度の文化勲章受章者木村資生氏のとなえた分子進化の中立説の意義も、「種の起原」抜きでは語れない。君達が持っているかも知れない弱肉強食の自然観、人生観も、遠

い源流をこの本に求めることができる。

このように、「種の起原」は現代科学と思想の一大原点であるにもかかわらず、意外に読まれることが少ない。その原因の1つに、この本自体の読みにくさがあるろう。全体に表現がくだくだしく、筋の運びもつかみにくい。しかし、これはダーウインの本意ではなかろう。むしろ彼は自分の新しい考えを読者に理解、納得させるための配慮を払ったはずだ。ただ、彼の意識にある読者は19世紀半ばの英国人であっただろうから、今のわれわれの知識や好みにあわないところがあるのも止むを得ない。また、生れたばかりの思想はけって理路整然とのべつくせるものではない。かならず、著者自身の割り切れなさ、ためらい、それを押しつけて書き進める意志との葛藤がある。その肉声を聴き取ることも、偉大な原典を読むことの重要性でもあり、魅力でもある。

この本の読み方は、他の古典と同様、まず1人で気楽に読むことだ。草原にでも寝転び、できれば赤鉛筆で心にとまった部分に書き込みをしながら通読していくのがよい。それには小型の岩波文庫版など好適だろう。この本についてのさらに進んだせんさくは、その後でよい。まず自分の素直な理解力、感受性を大切にしよう。

偉大な書物を読むことは、人間の偉大さを認識する1つの良い手段だと思う。また、そのことを通じて、君達の精神的年輪も次第に大きさを増していくことだろう。(農学部・応用昆虫学)

## 障害児教育理解の一助に

林 邦 雄

将来、教育に志ざす者、とりわけ障害児教育に関心を抱く諸君に一読をすすめたいと思う翻訳図書3冊をとりあげてみたい。

まずは、ジャン・マルク・ガスパール・イタール(古武弘正訳)※『アヴェロンの野生児』(牧書店)である。本書は18世紀末パリ郊外のアヴェロンの森で発見された野生児に対し、現代からみても驚くほどの科学的方法で教育を試みた記録であり、いまでは障害児教育の古典とされているばかりでなく、人間理解にとっても基本的な問題を提起している。この不朽の業績を残した著者イタールは、この時25歳の青年医師であった。本書はその後、セガンやモンテッソーリという偉大な教育者に影響を与え、今日の障害児教育や幼児教育に大きく貢献している。

つぎは、アーノルド・ゲゼル(生月雅子訳)※『狼にそだてられた子』(家政教育社)である。生後間もなくオオカミにさらわれた二人のインドの少女が、母オオカミとともに実に数年間をホラ穴の中ですごした後、人間世界にひきもどされ、アメリカの著名な児童心理学者ゲゼル博士によって科学的観点からまとめられた貴重な記録である。本書は人間の発達に対して影響を及ぼす要因が遺伝か環境かという本質的問題を提供し、イタールの前書とともに教育の重要性を指摘している。著者ゲゼルは学者としてすばらしい業績をあげているが、その一つ「発達診断学」は本学教育学部の新井清三郎教授によって翻訳されている。

さいごは、パウル・バック(松岡久子訳)『母よ嘆くなかれ』(法政大学出版局)である。上述の二著作は専門的に高度な内容を含み、読みにくい点も認められるが、本書の方は、必ずしもそのようなことはない。本書は知えおくれの子どもをかかえた著者が、不幸の子をもつ悲しみに耐え忍びつつも、子どもの幸福な人生の実現を目指していろいろと苦闘する遍歴の物語りである。教育には、もちろん、専門的知識・技術が必要であるが、なお、それを越えて親や子の心の悩みや痛みを理解する豊かな心情が要求されるとするならば、本書から得られるものは大きいといわねばならない。

なお、著者のパウル・バックこそ名作「大地」を著わした同一人であることを付記しておく。(教育学部・異常児教育)(※は本館所蔵)

## 静岡・清水市内の図書館と博物館

館名	住所	電話
静岡県立中央図書館	谷田 620	62-1241
静岡市立図書館	追手町 4-30	52-9512
久能山東照宮博物館	根古屋 390	37-2437
静岡市立登呂博物館	登呂 5-10-5	85-0476
静岡市文化財資料館	宮ヶ崎 102	45-3500
日本平動物園	池田 1767-6	62-3251
駿府博物館	紺屋町 15-4	52-0111
清水市立図書館	入江岡 975	52-6411
東海大学 海洋科学博物館	三保 2389	34-2385
東海大学 人体科学博物館	三保 2389	34-2385